



**HAL**  
open science

「多様化の実践 - 『アビシニアン』と『ドッグマザー』の冒頭文から-」

Fumiko Sugie

► **To cite this version:**

Fumiko Sugie. 「多様化の実践 - 『アビシニアン』と『ドッグマザー』の冒頭文から-」. すばる Subaru, 2019, pp.271-272. <halshs-03328123>

**HAL Id: halshs-03328123**

**<https://shs.hal.science/halshs-03328123>**

Submitted on 28 Aug 2021

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

## 「多様化の実践 — 『アビシニアン』と『ドッグマザー』の冒頭文から—

杉江扶美子（パリ・ディドロ大学博士課程）

古川作品の魅力のひとつに文体がある。ここでは「文体」をスタイルという広い意味でとらえ、行動・生活様式や生き方につなげるマリエル・マセの文体論を参考に（*Marielle Macé, Styles. Critique de nos formes de vie. Gallimard, 2016*）、文体を個性の表現より個体化の実践の場、「誰」なのかより「どのように」在るかが問われ続ける場であると仮定する。一例として『アビシニアン』（幻冬舎、二〇〇〇年／角川文庫、二〇〇〇年）と『ドッグマザー』（新潮社、二〇一二年）の印象的で対照的な冒頭の文体をみてみよう。

『アビシニアン』は次のように始まる。

「十億年がすぎて、わたしは東横線に乗りこんだ。ここまで来れば、都心まではあと一步だった。制服のスカートの上で組んだ両掌<sup>りょうて</sup>がいまにも踊り出しそうになる。午後だった。」（角川文庫）

まず、「十億年」から「東横線」へ意味の飛躍が音韻の類似で強調される。動作動詞が多く躍動的で、文の長短の変化が抑揚のあるリズムを出している。また、たとえば「心が躍る」なら動詞は隠喩だが、「手が踊る」では「手」が体の換喩になり動詞本来の意味が強まる。「十億年」から手へと急速にクローズアップされる視界の変化が大きく、年代違いの読み方をすれば『あるいは修羅の十億年』（集英社、二〇一六年）や「制服」の少女が「踊る」から『サウンドトラック』（集英社、二〇〇三年）が想起され、ダイナミックさが際立つ。

反対に、『ドッグマザー』には静けさと曖昧さがある。

「冬はただ寒いだけだ。それ以外に何の証しも持たない。夜だから息が白いのが見えると思ったけれど、それも時々だ。吐く息がそんなふうに見えるためには見える場所にいる必要がある。ここは夜の真ん中だ。そして色彩を奪うのが正しい夜だ。」（九頁）

語彙、表記、構文がシンプルで、動作動詞が少なくリズムも安定している。「冬」や「夜」が能動動詞の主体で場面を占め、引用に続く部分では文の構成要素がさらに削られ、一文ごとに改行され、空白と沈黙が目立つ。また、「それ以外に」「それも時々だ」「そんなふうにと繰り返される指示語は、指示内容を強調しながら遠ざけるので、意味の輪郭が全体的に曖昧になる。そこに「見える」の反復がモチーフのように逆説的な効果を加えている。

二作品の冒頭は対照的だが共通点もある。主人公は移動中で彼らの位置「ここ」は直示、可変的だ。実際『アビシニアン』の「わたし」は『沈黙』（幻冬

舎、一九九九年)から、『ドッグマザー』の「僕」も『ゴッドスター』(新潮社、二〇〇七年)からやってきた「移民」といえる。読者が本を開く前から物語は始まっていて、始点は通過点という流転する世界観がある。

短文で引き締まったリズムは古川文体の特徴だが、リズムは個人の体質にも深くかかわり、古川作品を苦手と感じる読者もいるだろう。しかし、書き手も読み手も安易な同一性や合意を拒み他人のリズムとのズレに敏感になり、異なるスタイルと衝突しつつ初めて自らのスタイルを変質できる。その意味で、多様性の表現にとどまらず多様化を実践する古川作品は、読者が感じ方や考え方を更新、再編成できる「場」だといえる。